

## 海外研修航海の継承 ～恒常性と独創性に着眼して～

○吉原さちえ（東海大学）

キーワード 海外研修航海 継承 恒常性 独創性 経験者

### 1. はじめに（研究背景と研究目的）

東海大学ではユニークな実践教育の場として大学が所有する実習船かつ国際航海旅客船でもある望星丸を活用し、「海外研修航海」という独創性豊かなプログラムを行っている。1968年に第1回航海を実施して以来、半世紀に渡って一度も途切れることなく歴史と伝統を継続する中で本研修航海を通じて訪問した地は70箇所へのぼり、航海日数は2306日、研修に参加した学生は4034名、団役員（教職員）は683名である。この航海は学校法人東海大学傘下の大学・短大生（第31回からは外国人留学生を含む）が学部学科の枠を越え、船という限られた生活環境に集い、大自然の中で様々なことを学び、各寄港地では現地の大学などと国際交流を実践し、国際的視野を広げる企画を実践している。2019年度第51回目の海外研修航海は、航海半世紀の歴史を踏まえ生涯の理想を求める船旅としての原点に立ち戻り新たな1歩を踏み出す航海として出航直前まで準備を進めてきた。しかし、2020年1月以降に日本で大型クルーズ船内の新型コロナウイルス感染拡大が連日報道され、第51回海外研修航海は2月10日（出航10日前）にやむなく中止が決定された。50年もの間、海外研修航海が継承されたのは本研修の恒常性と独創性であることともに価値や意義を分かち合う経験者の経験知の賜物である。従って本研究目的は、一団役員さらには副団長として本研修を取りまとめる立場で第51回に携わった経験を踏まえて、海外研修航海の恒常性と独創性に着目し明確化することで、再び実施され継承していくための不可欠な足掛かりを探ることである。

### 2. 研究方法

1968年3月（1967年度）から2019年2月（2018年度）の過去50回における海外研修航海に関する資料を参考することと、2020年2月（2019年度）に実施予定されていた第51回海外研修航海の研修団の実際の活動経験を振り返ることによって本研究を進める。

### 3. 研究結果

#### 1) 研修航路と応募及び参加学生数

これまで訪問した地は70箇所を上回るが、第28回（1996年6月下旬～10月）の世界一周航海を除くと本研修における研修航路は南太平洋諸国とアジア諸国に大別される。前者と後者を巡る航海によって研修学生数の応募と参加人数に違いがある（図1）。

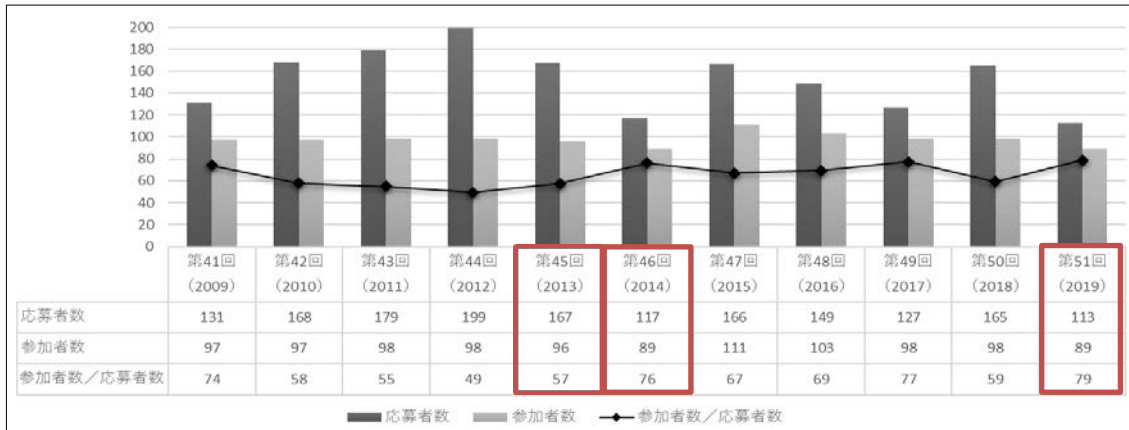


図1 過去10年間の応募者数と研修参加学生数とその割合 ※赤枠はアジア航路、それ以外は南太平洋航路

## 2) 事前研修と本研修プログラム（洋上と地上）

事前研修は12月下旬に2泊3日で1回限り実施される。本研修は約40日間航海期間中に船内で日常生活を送りながら、洋上と地上に分けられた様々なプログラムに取り組む。限られた空間で行う洋上プログラムは活動内容が定着化されつつある一方、地上は寄港地ごとに異なるテーマを掲げ研修内容も方法も流動的である（表1、表2）。

表1 本研修：洋上

項目	内容
洋上講座	団役員及び望星丸士官による専門分野（全13回）
外国語講座	ネイティブ団役員による実践英語（全8回）
一次救命処置	医師・看護師団役員による救命救急
調査	寄港地（歴史・自然・文化）と航海（望星丸・船内業務）
行事	スポーツ大会・大学交流 洋上卒業式（卒業生を送る会）・Farewell Party・その他
クラブ	English&Fishing・韓国文化・シネマ&カフェ・音楽 Bosei Memory・女子カアップ・トレーニング&海洋観測・球技 かるた&テーブルゲーム・洋上オリンピック&パラリンピック

表2 本研修：地上

寄港地		テーマ	研修方法
那覇	沖縄	歴史と文化	グループ別/全体
コタキナバル	マレーシア	自然と文化	全体/選択別/グループ別
バンコク	タイ王国	大学交流と文化	全体/選択別
ダナン	ベトナム社会主義共和国	歴史と文化	グループ別/選択別
基隆	台湾	歴史と文化	全体/グループ別

<研修方法> ①全体：全学生が同研修を実施 ②選択別：希望選択した研修を実施  
③グループ別：グループ別に研修の企画と実施

## 3) 団役員と研修学生

第51回の参加予定研修学生は89名、団役員は15名で、そのうち過去に本研修に参加経験のある研修学生は4名、団役員は団長（第25回団役員）と副団長（第43回団役員）の2名であった。研修学生の経験者が再乗船することは稀であり、団役員の経験者は初経験から数年または十数年のブランクと乗船数は2~3回程度、前回とは異なる立場で携わることが殆どである。

## 4. 考察及びまとめ

海外研修航海を継承する必須要素として「恒常性」と「独創性」と掲げ、3つの側面から検証した。1) 研修航路による応募人数の変動があり、2) 事前研修と本研修では定着性と柔軟性のあるプログラムが混在し、3) 船上生活と寄港地研修は団役員及び研修学生はほぼ未経験者で、経験者は数年から十数年のブランクがある。東海大学のユニークな実践教育の場は2つ航路を巡りながら恒常性を担保し独創性ある内容を一部経験者と未経験者の団役員と研修学生で創造してきたが、歩みの再開と継続には普遍化と可視化が必要ではないか。